

お話しいただく方々



木村 孝さん (92)

染織研究家・随筆家
和の美意識を伝え続けている
和の美を追究する原点の欧米体験
裏面で詳しくご紹介しています



久木 綾子さん (93)

作家
『見残しの塔』でのデビューは89歳
70歳からの驚異的な創作活動の日々
詳しくは裏面をご覧ください



細川 照子さん (89)

細川民族舞踊研究会代表
二代目 細川千光
舞踊家の若き日の意外な経歴とは？
裏面にその解答が…



山田 里津さん (87)

日本看護学校協議会共済会
初代会長・現最高顧問
数多くの看護師を育てた「母」
献身の半生は裏面で詳しく



宇梶 静江さん (79)

詩人・古布絵作家・絵本作家
アイヌ文化継承者
壮絶な半生と63歳からの再出発
詳しくは裏面でお読みください

●他にも各種生産に従事する方々など様々な皆様参加します

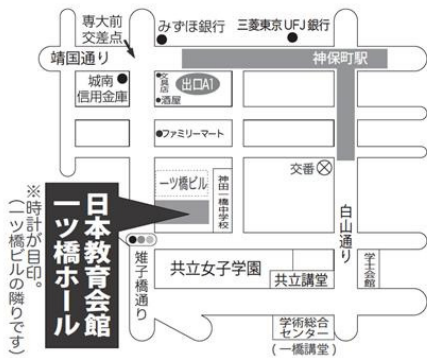
日時・平成24年11月10日(土)

13:30 開場 14:00 開演 (終演 17:00)

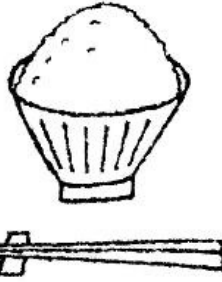
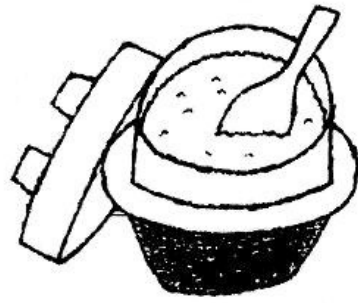
会場・日本教育会館 一ツ橋ホール

参加費・予約 1,000円 (当日 1,300円)

- 前日までに電話・FAX・メール・Facebook等でご予約ください
- 小さなお子様とご一緒に参加できるファミリー席もございます



交通機関のご案内
東京メトロ半蔵門線・都営新宿線・都営三田線
/ 神保町駅(出口A1)



画・加納和典

第1回 美しい日本を残すために協力し合う会

何を大切に暮らしていますか

「3・11」以降、多くの人々が生活・生き方そのものに迷いを感じております。今まで以上に生きること意識的にならなければいけない時代に来ているにもかかわらず、働き、ただ消費するだけの毎日を送っている人がいかに多いことかと悩む日々です。生き活きと生活されている方にお会いする機会もたいへん少なくなりました。

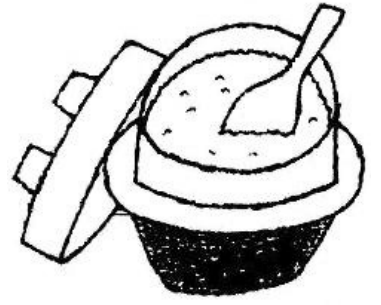
このままでは、美しい日本が失われてしまいます。不安と焦りの中で何かをしなければと思った時に、丁寧に毎日を送っていらした人生の先輩方においていただき、その方々がこれまでの日々の暮らしで「何を大切にされていらしたか。これから何を大切にしていけるのか」をお話しいただきたいと考えました。そのお話の中から、次世代の私たちが手がかりを学ばせていただき、美しい日本の暮らしのあり方を共に実行して参りたいと思えます。あなたもぜひご参加ください。

主催 美しい日本を残すために協力し合う会 会長 木内 孝 代表 中川 誼美

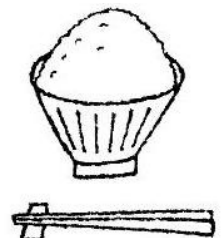
お問合せ&ご予約・TEL&FAX: 03-3715-4884 (事務局・市川)

HP・http://utsukushii-nippon.jimdo.com/

Facebook・http://www.facebook.com/utsukushii.nippon/



丁寧に毎日を送っていらした人生の先輩の方々は、何を大切に暮らしていらしたのでしょうか
 これから、何を大切に暮らしていくかとされているのでしょうか
 美しい日本を残すために、先頭に立っていただく方々です



● 京都の染屋に生まれて家業を継ぎ、女性染色作家の先駆けとなった**木村孝**(きむら・たかさん)。また一般の海外渡航が困難だった一九五〇年代に三〇代で単身ニューヨークに渡り服飾デザインを学ぶ。結婚後の一九六三年には夫の転勤に伴いロンドンへ。五年間の滞在中、ヨーロッパの服飾史やテキスタイルを研究した。一九六八年に帰国して以降、その幅広い視野を活かし執筆・講演活動を続ける。「和の美」に対する深い造詣、現代性がありながら伝統を踏まえた上品なきものコーデイネートは第一人者として定評がある。

● 「八十九歳の作家デビュー」と話題になった**久木綾子**(ひさぎ・あやこさん)。結婚して夫が口にした「女性が書く姿は好きじゃない」という一言で筆を折り、以来半世紀を専業主婦として過ごした。再び文学の道に戻ったのは夫の死後、七〇歳を超えてから。山口県の瑠璃光寺で見た五重塔の虜となり、宮大工に弟子入りするほど時代考証に万全を期し構想十四

年。執筆のために八〇歳からパソコン教室に通い、四年がかりで『見残しの塔』(新宿書房)を書き上げた。時に八十九歳。その精緻な表現と美しい日本語は読む人の心を揺さぶる。現在第三作目を執筆中。

● お稽古事三昧の日々を送るお嬢さんだった**細川照子**(ほそかわ・てるこ)さんが、社会に目覚めたのは高等女学校時代。卒業後には花嫁学校を親に無断でやめて家出。働く女性の団体「藻潮会」の寮で共同生活をしながら、市川房枝、山高しげりら女性運動家に学んだ。一九五二年、血のメーデーに遭遇し合化労連に入社。後に総評議長ともなった大田薫委員長の秘書を長年務めた。三十二歳の時が

高等看護学院学院長、日本看護学校協議会会長を歴任するなど、一貫して戦後の看護職教育に携わってきた「看護婦(看護師)の母」だ。一九九一年には人間愛による全人的医療を目指して、自ら二葉看護学院を設立。さらに二〇〇四年には高齢社会に対応する人間愛による人間福祉を目指した「一葉介護学院」を設立して介護福祉士教育にも力を注いでいる。

● **宇梶静江**(うかじ・しずえ)さんは、差別と貧窮から抜け出そうと十代で上京。平穏な結婚生活を手に入れ二児にも恵まれたものの、やがて自分の中に封じ込めてきたアイヌと向き合い、アイヌの権利獲得運動に邁進する。六十三歳になった時アイヌの基本に立ち返ろうと一年間アイヌ刺繍を学び直し、アイヌの精神世界を古布に伝統刺繍で描く独自の

世界を創り上げた。自然を神と敬う縄文の心を追い求める詩情豊かな作品は国内は勿論海外でも高く評価されている。

● **山田里津**(やまだ・りつ)さんは、一九六九年の千葉県衛生専門学校創設を皮切りに、一九七四年には三井記念病院

